第2章　新居浜市の概況

2-1．新居浜市の概況

2-1-1．新居浜市の位置

新居浜市は、東経 133 度 17 分、北緯 33 度 57 分に位置し、東は四国中央市、西は西条市、南は高知県に接し、北は瀬戸内海の燧灘(ひうちなだ)に面しています。

2-1-2．新居浜市の歴史

新居浜地方には、数千年前の昔から人々が住みついていたことが、遺跡や発掘品からうかがえます。この地方は明治 22 年町村制の施行により、新居浜(明治 41 年町制実施)、金子、高津、垣生、神郷、多喜浜、大島、泉川(昭和 14 年町制)、船木、角野(昭和 14 年町制)、中萩(昭和 17 年町制)、大生院の 12 か村となりました。その後、昭和 12 年 11 月 3 日に新居浜、金子、高津の 3 か町村が合併し、人口 32,254 人の市制を施行、昭和 28 年 5 月 3 日に垣生、神郷、多喜浜、大島の 4 か村を、昭和 30 年 3 月 31 日に泉川、船木、中萩、大生院の 4 か町村を、昭和 34 年 4 月 1 日に角野町を、平成 15 年 4 月 1 日に別子山村をそれぞれ合併し、現在は人口 12 万 1,211 人(平成 29 年 4 月 1 日現在・住民基本台帳)、面積 234.46 ㎢(国土地理院)の県内第 3 の都市となっています。

元来、新居浜地方一帯は、農漁村に過ぎませんでしたが、元禄 4 年(1691 年)の別子銅山の開坑によって、住友関連企業群を中心に、四国屈指の工業都市として発展してきました。

新居浜市議会事務局平成 29 年度版「にいはま市政概要」より

2-1-3. 新居浜市の自然

新居浜市は、東は四国中央市、西は西条市、南は東赤石山を主峰とした赤石山系、別子山地域、四国山地を境に高知県に隣接しています。赤石山系は特異な自然環境を有し、ツガザクラを始めとする貴重な高山植物が群生しています。こうした貴重な自然環境もあり、昭和 51 年 3 月には愛媛県の自然環境保全地域に指定されています。

また、市の北側は瀬戸内海の燧灘に面しており、市内唯一の離島である新居大島には市営の渡海船が運航されています。このように、新居浜市は山と海両方の自然を満喫できる自然豊かな環境を有しています。こうした自然を活用し、**「別子ライン」**(市内中央部を流れる国領川上流に架かる朱色鮮やかな生子(しょうじ)橋からマイントピア別子・鹿森ダム・遠登志(おとし)渓谷・清滝等を経て、河又に至る延長約 10km の渓谷景勝地)や、新居浜市から四国中央市へと続く**「別子・翠波はな街道」**(愛媛県の東部、赤石山系・法皇山脈の山々を囲むように国領川と銅山川をつなぐドライブコース)などの自然豊かな観光資源があります。

ツガザクラ

別子ライン

新居大島

東赤石山

別子・翠波はな街道

2-2. 新居浜市の社会状況と観光振興計画策定の意義

2-2-1. 新居浜市の人口

新居浜市の人口は、昭和 55 年(1980 年)をピークに減少しており、合計特殊出生率(平成 20-24 年)は 1.80 と四国内で最も高いものの、2040 年の推計人口は、平成 22 年(2010 年)国勢調査人口 121,735 人から約 2 万 7 千人の減少が見込まれ、人口 10 万人を切ると推計されています。今後も、少子高齢化等に伴う自然減、10 代の転出超過等に伴う社会減の状態が継続すると予測されています。

特に、生産年齢人口の減少(2010 年：72,283 人⇒2040 年：49,584 人)が見込まれており、新居浜市を将来にわたり持続可能なまちへと発展させるためには、人口減少問題を克服し、地域経済の活性化を実現していくことが最重要課題となっています。

そのため、こうした人口減少に対し、観光振興によって観光客の増加による賑わいの創出や観光客の消費による経済の活性化を目指します。

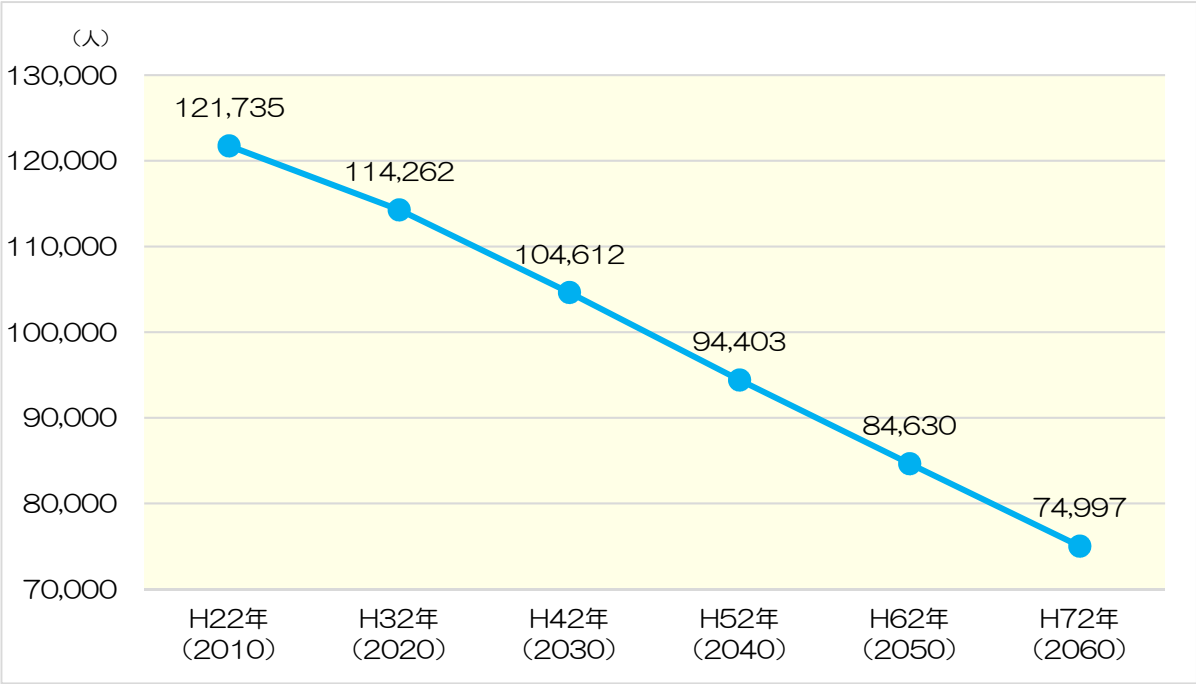

図 1. 新居浜市の人口の推移(国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」より)

観光振興への取り組みの意義

定住人口が減少する新居浜市において、交流人口の増加により、人が賑わう活力ある新居浜市を実現する。

2-2-2. 新居浜市の産業

新居浜市は、平成 26 年度に「地域経済構造分析調査」を実施し、「平成 24 年新居浜市産業連関表」を作成しました。新居浜市の産業の特徴として、以下が挙げられます。

(1). 新居浜市の産業構造

- 新居浜市内生産額は 1 兆 657 億円(愛媛県全体の約 1 割)
- 原材料やサービス等の購入額「中間投入額」は 5,740 億円、「粗付加価値額」は 4,917 億円
- 市内で生み出された粗付加価値額 4,917 億円に対し、市内で必要とされる需要額は 4,720 億円で、超過分 197 億円は新居浜市経済の黒字分となります。これは移輸出の超過(移輸出―移輸入)にも現れています。
- 国、県と比べ移輸入、移輸出の割合がともに大きく、域外への移輸出に支えられた粗付加価値の超過(地域経済の黒字)が新居浜市の特徴となっています。

(2). 産業連関表等に基づいた分析

①製造業(域外市場産業)

- 市内生産額の構成比(13 部門)での製造業(53.9%)は、全国平均と比べても比重が高くなっています。
- 「地域雇用貢献(従業者数)」、「域外マネー獲得(移輸出)」、「所得創出(生産額、付加価値)」の観点からも製造業各部門が目立っており、新居浜市は製造業を中心とした域外市場産業に支えられている移輸出依存経済と言えます。

②非製造業(域内市場産業)

- 市内生産額の構成比(13 部門)におけるサービス業(14.3%)、商業(5.7%)の割合は、全国平均と比べて大きく下回る水準となっています。
- 市内就業者数では、商業や医療・介護、対個人サービスが上位となっており、「地域雇用貢献」産業となっています。
- 特に、商業は特化係数(全国比)が低く、市際収支も大幅な移輸入超過となっています。

以上の分析からも、新居浜市は、製造業を基盤とした移輸出依存経済であり、かつ観光関連産業の規模は小さいことが推測されます。交流人口の増加によって、新居浜市における観光関連産業の比重を拡大できれば、新居浜市経済はより盤石な産業構造を持つこととなります。また、こうした新しい産業振興は、新しい所得と雇用を地域にもたらします。

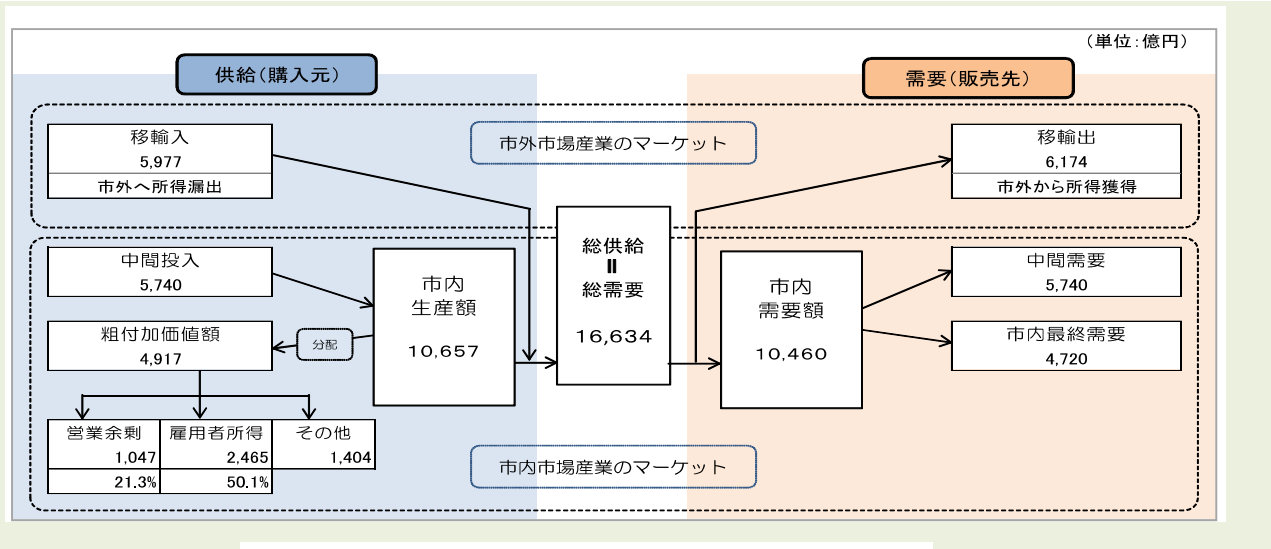

図 2. 新居浜市の財・サービスの流れ(平成 24 年版)

観光関連産業への取り組みを強化する意義

製造業に加え、観光関連産業においても強みを持つことにより

●新居浜市におけるより盤石な産業基盤を形成する。

●新たな所得・雇用を創出する。

2-2-3. 別子銅山近代化産業遺産群の保存・活用への取り組み

新居浜市には、多くの別子銅山関連の産業遺産(以下、「産業遺産群」と言う。)が残っています。元禄３年(1690 年)に別子山中における露頭の発見により、住友家による別子銅山請負稼行が徳川幕府により認可され、翌年、元禄４年(1691 年)に別子銅山が開坑しました。以来、昭和 48 年(1973 年)の閉山まで 283 年にわたって、累計約 65 万トンもの銅を産出しました。別子銅山で産出された銅は、江戸時代から昭和に至る日本経済の成長を支え、近代化の礎となりました。また別子銅山は、様々な環境問題に直面し、煙害対策や植林事業など環境配慮型、自然共生型社会の先駆的事例ともいえる取り組みを行ってきた経緯もあります。

現在では、こうした別子銅山に関連する遺産の数々を、産業遺産群として保存・活用し、次世代へ継承していく取り組みを推進しています。

○産業遺産群の紹介

参照：新居浜市「-別子銅山と近代化遺産-未来への鉱脈」「四国新居浜　別子銅山案内マップ」

東平(とうなる)エリア

-人々の暮らしがあった「東洋のマチュピチュ」-

明治 35 年(1902 年)、延長 1,759 メートルの第三通洞が貫通し、明治 44 年(1911 年)には日浦まで延長 2,120m が貫通すると、東平は物資輸送の中継所となりました。大正５年(1916 年)には、採鉱本部が東延(とうえん)から東平へ移転し鉱山町となります。採鉱事務所、貯鉱庫、選鉱場、索道基地、インクライン、変電所のほか、社宅、学校、劇場、接待館など文化施設も整っていました。最盛期には約 5,000 人を超えた人口も、昭和 43 年(1968 年)の東平坑の閉坑により人の出入りはなくなりましたが、平成６年(1994 年) のマイントピア別子東平ゾーンのオープンで産業遺産観光の場として再生を遂げました。東平エリアは「東洋のマチュピチュ」と呼ばれ、観光客に親しまれています。

東平貯鉱庫・索道基地跡

東平歴史資料館

第三通洞

インクライン跡

端出場（はでば）エリア

-産業と自然が共生する場所-

端出場エリアは、明治 26 年(1893 年)の別子鉱山鉄道下部線の始発駅として発展し、昭和 5 年(1930 年)から昭和 48 年(1973 年)の閉山まで採鉱本部が置かれ、採鉱の拠点となりました。平成 3 年(1991 年)には、産業遺産を活用した観光施設マイントピア別子端出場ゾーンがオープンし、多くの観光客で賑わっています。国の登録有形文化財となっている別子鉱山鉄道跡である端出場鉄橋や、端出場隧道など貴重な産業遺産が点在しています。また対岸には、明治 45 年(1912 年)に操業が開始された旧端出場水力発電所（国の登録有形文化財）の煉瓦造りの建物があり、中にはドイツ・シーメンス社製の発電機をはじめとした操業時の発電関係機器がそのまま残っています。

マイントピア別子（端出場ゾーン）

旧泉寿亭特別室棟

旧端出場水力発電所

旧端出場水力発電所内　発電設備

端出場鉄橋・鉱山鉄道

第四通洞

星越（ほしごえ）エリア

-生きた昭和のまち-

星越エリアは、大正 14 年(1925 年)に設置された旧新居浜選鉱場を中心に開発されたエリアです。別子鉱山鉄道の星越駅が置かれたことにより、関連企業の社宅群が建設されました。山田社宅は、平均 100 坪を超える生垣に囲まれた一戸建て住宅が連なり、現在も 30 戸余りの社宅が残っています。

旧星越駅舎

山田社宅（元住友共同電力㈱社長宅）

上原（うわばら）・山根（やまね）エリア

-歴史を伝える静謐-

上原エリアには、別子銅山の近代化を主導し、「銅山中興の祖」である住友総理人　広瀬宰平の居宅であった旧広瀬邸(国指定重要文化財)、広瀬の顕彰施設である広瀬歴史記念館があります。また、山根エリアの山根製錬所跡周辺には、旧製錬所の煉瓦造りの煙突が佇んでいます。昭和 3 年(1928 年)には、製錬所跡に別子銅山鎮護の大山積神社が祀られ、境内には別子銅山記念館があります。

旧広瀬邸

広瀬歴史記念館

生子山（えんとつ山）

別子銅山記念館

こうした産業遺産群は、新居浜市の重要な地域資源です。このような地域資源を観光資源として積極的に利活用し、対外的に情報発信していくことは、新居浜市民にとっても新居浜市の魅力を再発見する重要な機会となります。こうした機会は、新居浜市民としての誇りや愛着（シビックプライド）の醸成や、歴史・文化の次世代への継承にも繋がっていきます。

産業遺産群の保存・活用への取り組みを強化する意義

新居浜市の重要な地域資源である「産業遺産群」を観光振興に活用することにより

- 新居浜市民としての誇りや愛着（シビックプライド）を醸成する。
- 歴史・文化の次世代への継承に繋がる。